

# 第一次世界大戦をめぐる非戦論

—キリスト者・社会主義者を中心として—

太 田 雅 夫

- 一、明治期非戦論の系譜
- 二、第一次世界大戦への参戦
- 三、キリスト者の非戦論
- 四、社会主義者の非戦論

## 一、明治期非戦論の系譜

わが国が、明治以降おこなった戦争にたいして、戦争を非としあるいは戦争に反対する思想、および非戦運動あるいは反戦運動は、日露戦争までは、まことに微弱で北村透谷の平和論を除いては、特筆すべきものはない。非戦論や非戦運動といえば、日露戦争によって端を発したといってもよいであろう。そしてその非戦論・非戦運動は、おもにキリスト者の一部および社会主義者によって唱道され、実践されることとなった。その例は、キリスト者の場合は、『聖書之研究』における内村鑑三、『上毛教界月報』における柏木義円、さらに平民社の社会主義者とともに非戦論を展開した安部磯雄・木下尚江などで

あり、社会主義者の場合は、平民社の幸徳秋水・堺利彦などが挙げられる。では、何故に日露戦争頃になると、キリスト者の一部や社会主義者のなかに非戦論が抬頭してきたのであろうか、その理由はつぎのようなものであると考えられる。

まず第一に、キリスト教界の主流である植村正久、本多庸一、井深梶之助、小崎弘道、海老名弾正などが、日清戦争をつうじてみづから反国家的、反社会的でないことを実証するため、天皇制と妥協し積極的に戦争を合理化して、「義戦」という名のもとに、政府の膨張主義政策、軍国主義政策への協力者となった。これにたいして、キリスト者の一部は、本来、キリスト教は平和の宗教であり、キリスト者は人間が殺しあう戦争に対して徹底的に反対する存在であるべきであるとし、キリスト教の博愛主義は、いかなる意味でも、戦争そのものと相容れぬ理念に立つものとして、非戦論を展開した。

第二に、わが国の資本主義が発展するにつれて、戦争は次第に帝国主義的形相を呈するが、その反面労働者の増加と団結、さらに階級的自覚が高揚し、戦争が労働者を犠牲にして行なわれることに対して反対する。また資本主義の発展は、必然的に社会主義思想の勃興をうながし、そして社会主義が帝国主義戦争に反対するのは理論上においても当然のことである。社会主義者による非戦論が展開された。

かくして、わが国の非戦論・非戦運動は、明治後期においてようやく勃興したのであるが、わが国の社会主義者の非戦論・非戦運動を考へる場合にも、キリスト教の影響を受けたことが大であったことを知らなければならない。それは当時のいわゆる初期社会主義運動の中心勢力がキリスト教系統のものであったからである。<sup>3)</sup> 日露戦争の反戦運動が、非戦運動とよばれるのも、キリスト教の影響であろう。大正後期になると非戦運動が反戦運動とよばれるのは、やはり社会主義思想の影響であると思われる。しかし第一次世界大戦時は、まだわが国においては、社会主義者といえども非戦論・非戦運動・非軍備拡張論などの言葉を使っているもので、本稿では非戦論という言葉を使用する。

ところで、日露戦争にあたって、いくたの弾圧にも屈せず主戦論に対抗して華々しく展開された非戦論・非戦運動は、そ

の後、どのように受け継がれ、大正期の第一次世界大戦においてあらわれたであろうか。これまでの諸研究においては、第一次世界大戦をめぐる非戦論は内村鑑三の非戦論をのぞいては、ほとんどふれられたことがなかった。<sup>(4)</sup>それは、第一次世界大戦時には、非戦論がなかったと思われていたからである。果してそうであろうか。とくに帝国主義戦争下の社会主義者の第一の課題は非戦運動でなければならぬはずである。第一次世界大戦時のわが国が帝国主義であったことは事実である。大戦中の対華二一カ条要求・西原借款なども露骨な帝国主義的要求であったし、また戦争を通じての独占資本主義の形成は、帝国主義としての成熟を意味している。そうだとすれば、社会主義者は非戦運動を展開しなければならぬ。なぜ第一次世界大戦において非戦運動いな非戦論さえがクローズアップされないであろうか。その理由として、つぎの二点があげられるであろう。

まず第一に挙げられるのは、一九一一年（明治四十四年）一月、大逆事件によって、幸徳秋水以下一二名の処刑が行なわれたが、大逆事件の余波は全国に及び、平民社以来の社会主義者たちに対する圧迫は苛酷をきわめた。したがって、いわゆる「冬の時代」に第一次世界大戦を迎えることになったのである。従来、平民社の社会主義たちと行動をともにしてきたキリスト教社会主義者たちは、これらのグループから離れていき、キリスト者の非戦論は、内村の『聖書之研究』とか柏木の『上毛教界月報』あるいは、『六合雑誌』の誌上<sup>(5)</sup>において唱えられるのみにすぎなくなったのである。また社会主義者の非戦論も、大杉栄・荒畑寒村の月刊『平民新聞』や、堺利彦・山川均などの『新社会』誌上にあらわれる程度で、非戦運動として展開されることはなかった。

第二の理由としてあげられるのは、わが国の第一次世界大戦への参戦が、日露戦争と違ってわが国の命運をかけた性質のものでなく、好運に乗じて帝国主義的進出をねらう投機的性質をもち、しかも敗北の危険性がないという戦争への介入の仕方が影響を与えているであろう。戦争を通じての経済の急速な成長、好景気の現出、対独宣戦布告後のわが軍の快調な進撃

という事態は、非戦論・非戦運動をあまりにも困難な状況におかしめたといわざるをえない。

以上のような理由によって、第一次世界大戦をめぐる非戦論は、非常に困難な状況にありながら、日露戦争時の非戦論の伝統がなお細々ながら受け継がれていた事実にもスポットをあてて考察してみようとするのが本稿の意図である。したがって、まず、第一次世界大戦をめぐる世論の動向をのべたのち、キリスト者の非戦論と社会主義者の非戦論について考察してみよう。

(1) 北村透谷は、東京専門学校を出て自由民権運動に従事していたが、明治二十三年フレンド教会員をもって「平和会議」を組織し、明治二十五年三月、雑誌『平和』を創刊し、わが国最初の平和思想運動を展開した。いうまでもなく、フレンド派のキリスト教的平和運動を継承したものである。トルストイの平和思想をわが国で最初に紹介したのも透谷であったことは注目すべきである。田畑忍「明治二十年代の平和思想」『同志社法学』（昭和四十一年三月号）参照。

(2) 日露戦争時に非戦論を展開したキリスト者としてこの他に、浜松のメソヂスト教会牧師白石喜之助、評論家（のちの群馬県富岡町甘楽教会牧師）住谷天来、北海道札幌独立教会牧師宮川巳作および『六合雑誌』のユニテリアン協会に属する片山潜、西川光二郎、石川三四郎、河上清などがある。

(3) 明治三十四年五月二十日、日本最初の社会主義政党である社会民主党を結成（即日禁止）した、安部磯雄・片山潜・幸徳秋水・木下尚江・河上清・西川光二郎の六人のうち、幸徳をのぞいた五人はすべてキリスト者であった。

わが国の平和思想が社会主義思想とともに、政策の形をとって最初にあらわれたのが、この社会民主党の「理想綱領」「行動綱領」においてである。その「理想綱領」八か条中の第二番目に「万国の平和を来たすためには、先づ軍備を全廃すること」を謳い、「行動綱領」二十八か条の第二十六番目には、「軍備を縮小すること」をかかげているが、この綱領は安部の作成によるものである。

(4) 内村の非戦論については、政池仁『内村鑑三』、土肥昭夫『内村鑑三』、田畑忍「内村鑑三の戦争と平和にかんする政治思想」、『日本におけるキリスト教と社会問題』所収）などに詳しく紹介されている。なお最近になって柏木義円の非戦論が、伊谷隆一『非戦の思想』、笠原芳光「柏木義円」、『同志社の思想家たち』所収）にとりあげられるようになった。しかし、社会主義者の非戦論については、ほとんど研究がなされておらず、神田文人「日本の社会主義思想における反戦について―第一次大戦とシベリア出兵をめぐる―」『歴史学研究』（昭和四十三年七月号）にとりあつかわれている程度である。本稿は、この神田論文に負うところが大きい。

(5) 『六合雜誌』は、日露戦争時のように統一して非戦論を展開することができなかったが、それでも非戦論を展開した論文、時評が掲載されている。当時のユニテリアンのなかでも、主戦論者と非戦論者にわかれ論戦がなされていたように、『六合雜誌』(大正三年十一月号)の時評欄に「主戦か非戦か」という題でつぎのようにかかれている。「先夜も惟一館内で開かれた基督教同志会の例会で、面白い論戦も開かれたのである。主戦論者の論拠は一種の人生観にあって、人類の生活其者が戦斗であって、戦斗の止むところ則ち死滅あるのみと主張し、平和論者は戦争は要するに殺戮である。殺戮は文明の理想に反する。人類は何を苦んで同類相食み相殺さんとするのであるか、人類には寧ろ共同して相当るべき大敵がある。自然の征服の如き則ち其最たるものであるといふが如き主張であった。」

## 二、第一次世界大戦への参戦

一九二二年(明治四十五年)七月三十日、明治天皇が崩御し、乃木希典大將が明治天皇の後をおい自殺し、明治はここに終焉の幕を降して大正の新時代となった。すなわち「大正と明治との間に明らかなる国民思想の一線を劃するは、合理的にあらずとするも、吾人は何故ともなく新前代のけはいを感じず、大正に入りて初めて飛行機が帝都の空に飛びし如き偶然的の事件にも尚之を旧き社会的因襲に対する新文明の示威運動なるが如く感ず」(丸山侃堂「民衆的傾向と政党」『日本及日本人』大正二年一月一日号)という時代であった。

間もなく一九一三年(大正二年)の大正政変(第一次護憲運動)や、翌年のシーメンス事件による山本内閣の打倒にあらわれるように閥族打破・憲政擁護のスローガンのもとに、中産階級・小ブル・インテリを中心として民衆運動が展開された。山本内閣のあと、元老会議は、民衆に人気のある大隈重信に組閣(大正三年四月)させ局面を糊塗しようとしたが、この年も、前年にひきつづき深刻な経済恐慌にみまわれていたので、商業会議所を中心とした非特権資本家による前近代的租税である營業税廃止運動がつづけられた。また米価の低落に刺激された地主たちも、地租軽減運動をおこし、旧支配体制の動搖は深まっていたのである。

このような状態のとき、一九一四年（大正三年）七月、第一次世界大戦が勃発し、わが国もそれに参戦することとなった。まさに第一次世界大戦の勃発は、旧支配体制にとっては「天祐」であった。民衆の関心を外にそらすことに成功し、「挙国一致」の立場から、營業税廃止運動も地租軽減運動も中止になり、そのうえ大戦景気によって非特権資本家たちの反体制気分を雲散させ、閥族勢力は再び息をふきかえたのである。

松影山人は、『国家及国家学』において、当時の大隈内閣をつぎのように評している。

「減税問題と増師問題とに圧迫せられ、大隈内閣は昨今非常の苦境に陥り、或は議會開会前予算編成期に於て没落するであらうと云ふ感あらしめたのである。然るに幸なるかな歐洲に大乱が起り、内閣は多少漸く此苦境を免れ得たやうだ。

『外患ある時は国内平穩なり』とかや。……今回の歐洲大乱のために、其生命旦夕に迫まれりと思惟せられつつありし大隈内閣の地位も昨今稍安固を呈し來つた。若し此歐洲の大乱が猶四五ヶ月間継続したら、多分内閣は來る議會を無事通過することが出来やう。」（松影山人「断片評論」『国家及国家学』大正三年九月号）

第一次世界大戦は、世界の資本主義発達途上において、起らねばならない戦争であったといえる。第一次世界大戦は、イギリス・フランスなどの協商国側からみても、ドイツ・オーストリアの同盟国側からみても、まぎれもなく史上最初の世界的規模の帝国主義戦争であった。一九一四年（大正三年）六月二十八日、オーストリア皇太子がサラエボで暗殺されたことがその戦争の導火線に点火したものであって、七月二十八日、オーストリアがセルビアに宣戦布告したことによって第一次世界大戦ははじまった。八月には全世界の列強ほとんどがこれに参加し、わが国もまた八月十五日、ドイツに最後通牒を發し、二三日にはドイツに宣戦布告することによって第一次世界大戦へ参戦することになった。

第一次世界大戦の性格は「オートクラシーにたいするデモクラシーの戦い」と一般にいわれる。ではドイツの軍国主義にたいして、民主主義国側に加担し大戦に参加したわが国の当時の動向をみてみよう。一般にわが国の参戦の名分は「日英同

盟の誼」によってなされたことになっているが、当時の『日本及日本人』の論調はつぎのようになる。

「英国が既に歐洲の大戦乱に参加せる以上、日英同盟の誓約上、若し印度以東に於ける英国の領土及利益が侵害せらるる場合は、我邦たる者当然之を援助すべき義務を有す。第三者の喧嘩争論に、兵力の援助を為し、何等恩怨なき對手國と交戦せざるべからざるは、我邦の迷惑千万とする所にして、且つ平生に於ても日英同盟が、動もすれば却て東洋に於ける我が行動を掣肘せられ、同盟は独り彼に利にして我に不利なるの疑なきに非ざるも、盟約の儼然存する以上、我邦たるもの約章に違ひ、些の遲滞なく義務を負担し、以て友邦に対する信義を維持せざるべからず。……今日の機会に於て、日英同盟の義務を負担するといふことは、畢竟世界的利害問題に容喙する所以にして、後日時局の收拾上、東洋の覇權者として、有力なる発言權を獲得し得るの地歩を占得するものとせば、当局の声明も極めて機宜を得たりと謂ふべし。……鬼の居らぬ間に洗濯といふ語あり、吾人は決して堂々たる独立帝國として火事場泥棒に類するが如き行は好まざるも、近来列強の勢力が、余りに東洋を圧迫するの結果、我が戦勝の結果により、当然獲得すべかりし利益を、全く無意味に放棄したること、は、今も尚ほ世人の記憶に新なる所なり。今や歐洲の多事は、吾人が多年の努力に対する総収獲時たらしめたり。吾人にして、今日の時機を失せば、永久に世界の落伍者たらん。」（『日英同盟と日本の義務』『日本及日本人』大正三年八月一五日号）

この主張は、日英同盟の誓約を口実としながら、東洋におけるわが國の植民地支配の野望をあきらかに示しているが、この考えは当時のわが國の支配者に共通したものであった。また当時のアメリカ大使石井菊次郎は、日本の参戦の動機を「ヨーロッパの戦争は、軍閥野心と正義自由の争いであつて日本は、後者に与したること、日英同盟の誼によって名分のあつたこと、三国干渉に対する清算の手段としてドイツを山東の根拠地から驅逐せんとした<sup>し</sup>こと」と主張する。ともかくわが國の参戦の動機は、「日英同盟」の名分のもとになされているが、同盟國イギリスの海軍大臣チャーチル（Winston S. Churchill）は「日英同盟のいかなる条項にも、イギリスとして日本に援助を要求せしめるものはなかつた。しかるに開戦後一週間もたたぬ

ちに、日本国民は日清戦争の終りに旅順を去ることを余儀なくせしめられた状況と影響とを忘れていないことが明瞭になった。日本国民は今やドイツの勢力と利益とを極東から掃討せんと決意した<sup>2)</sup>と反論をのべている。同様にアメリカの國務長官ランシング (Robert Lansing) も、「ヨーロッパに戦争が勃発したことは、日本が支那に政治上の勢力と経済上の支配権を増進する新しい地盤を獲得する思いがけない好機会を提供した。日本はドイツとの戦争に参加すべき日英同盟上の義務なきにかかわらず、日英同盟を口実として、一九一四年八月一五日ドイツにたいして最後通牒を發し、山東省における青島の降伏を要求した。青島は当時ドイツが海軍根拠地並に商港として、一八九八年支那から強制によって獲得した租借条約に基き占領中であつた<sup>3)</sup>。」とその批判的見解を明らかにしている。

こうした参戦の動機にかんする日本と英米との意見の対立は、実は帝国主義列強の植民地再分割の戦いである第一次世界大戦の性格を如実に示しているといえよう。わが国の支配者の参戦正当化論は同盟国からさえも支持されていなかったことが明らかである<sup>4)</sup>。それにもかかわらず、当時の論壇は、「挙国一致」を提唱し、国民の参戦気分を昂揚させようとした。『日本及日本人』の九月号は、「臨時議會と挙国一致」と題してつぎのようになっている。

「宣言既に發表して、帝国の態度一決し、最早引退ならざる場合と為れる以上、事は実に国家の運命にも関す、唯だ国民の意識一致努力の力のみ国運を扶持して、時艱を救ふべし。各政党政派は勿論、国民たる者須らく挙国一致、最善を尽して俱に時局に対し、国家を泰山の安きに置き、夢め心得違あるべからず。」（臨時議會と挙国一致『日本及日本人』大正三年九月一日号）

また『中央公論』も十月号の巻頭論文で「挙国一致」を提唱した。

「膠州湾の攻撃は固より国命を賭するが如き大事件にはあらざるも、外に在て我忠勇なる艦隊及び軍隊が君国の為め犠牲奮斗するに際し、内人心の不和今日の如くなるは豈に国家の深憂に非ずや……平生無事の日に在りては党派の勝敗を争ふ



も可なりと雖も國家有事に際しては須らく党派根性を去り公明の心事に立返へらざる可らず、苟も國家の大事を自家權勢の支持の爲め利用せんとするが如き、少くとも斯かる嫌疑を招くが如き、即ち精神的挙國一致を不可能ならしむる所以なり。……國家有事の日本政府を支持するは政府を支持するに非ず國家を支持するなり」(『中央公論』大正三年十月号)

戦争という國家有事の重大事にさいして、意見の相違はあろうとも、それをのりこえて統一し、挙國一致で戦争に望むべきことを強調していることはいうまでもない。そして、この戦争は、日清・日露の戦争と同じく、「正義の戦争」だと『中央公論』十一月号では主張する。すなわち、戦局がヨーロッパでもアジアでも連合國に有利に展開しているのは、連合國に正義があるからだとのべ、さらにつぎのようについて、「近くは日清戦争・北清事変・日露の役を回顧すれば我邦の態度主張毎に大義名分の正しきに居れるは吾人が回顧し竊に満足を感じ能はざる所なり」(『戦局の發展と大義名分』『中央公論』大正三年十一月号)まさに、過去のわが國の帝國主義的な侵略戦争を免罪しているのである。

しかしながら、当時の支配者や論壇が、いくら「挙國一致」「正義の戦争」を呼びかけても、一般の國民はもう一つ戦争気分が盛り上らなかつた。なぜならば、戦争への参加の仕方がすでにのべた通り、わが國の命運をかけたものでなく、戦争に便乗してわが國の帝國主義的進出をねらつたものであり、敗北するということが考えられないという状態で、國民の間に緊迫感が欠けていたのである。だからこそ日露戦争のときのような主戦論に対抗して非戦論が浮びあがるということも少なかつたといふべきである。

大戦が終つて『太陽』が「世界大戦」の特集を行なつた記念増刊号に、大戦中のわが國民の状態をつぎのようについていふことからも想像できるであらう。

「日本は這次歐洲大戦に参加して、陸軍は山東の一角より独逸の勢力を駆逐し、続いて西比利亞にまで出動し、海軍は世界各方面の海上に於て協同作戦したるにも不拘、勿論独逸を敵としたと言っても、日本の立場より見ると、夫れが必ずし

も国家の死活に関する程の戦争でなかったからでもあらうが、何れの方面に於ても殆んど戦争気分と云ふものがなく、民心は戦争参力によって緊張したと云ふよりも、却って浮華軽薄、常に立つ調子に流れ、斯くて斯の曠古の大戦に参加しながら、結局戦争に従事して居ると云ふ真剣に緊張した精神を見ることが出来なかったのではないか。……日本は交戦国の地位にありながらも、尚ほ普通戦争の場合に起る緊張したる精神なく、真剣に挙国一致の必要を感ぜざるのみか、殆んど傍観者の地位に立ちて、戦争と實際生活との間に何等の交渉もなかったのである。<sup>(6)</sup>

このような戦争気分ので、当時の非戦論がどのような形で、どのような内容をもって、展開されたかを論じてみよう。

- (1) 石井菊次郎『外交余録』一〇〇ページ。
  - (2) Churchill Winston S, *The World Crisis* (1911~1914), London, 1923, p. 292.
  - (3) War Memories of Robert Lansing, New York, 1935, p. 281.
  - (4) レーニンは、「われわれがこれまで勝利してこられたのは、ひとえに列強間の深刻きわまる不和のおかげであり、ひとえにこれらの不和が偶発的な党派内部の不和ではなかったということ、それは、帝国主義諸国間の経済的利害の、きわめて深刻な抜きがたい反目であるということ、これら帝国主義国は、土地と資本の私的所有の基礎に立つ以上、ソヴェト権力に対抗して力を結集しようとする試みが、無効果におわたったほどの略奪政策をとらざるをえないということのおかげである。」(『レーニン全集』第三一巻四七二ページ)といっている。
- なお、わが国の第一次世界大戦参戦に関する分析は、井上清『日本帝国主義の形成』および天野真宏「わが国の政党政治形成期に関する一考察」『同志社法学』（昭和四十三年五月号）を参照した。
- (5) 神田文人「日本の社会主義思想における反戦について」『歴史学研究』（昭和四十三年七月号）。
  - (6) 「世界大戦」『太陽』第二五巻第八号（大正八年六月一日）。

### 三、キリスト者の非戦論

日露戦争時の反戦論は、非戦論と称されるほどにキリスト教の影響が大きかった。しかし、平民社に集って非戦論を展開

していたキリスト教社会主義者は、第一次世界大戦時には、殆んど姿を消し、非戦論を（積極的ではないが）唱えたのは安部磯雄のみという状態であった。すなわち、日露戦争が終結し平民社の解散後（明治三十八年十月九日）、キリスト教社会主義者であった西川光次郎は、科学的社会主義を唱え山口義三とともに『光』を発行し、石川三四郎は、木下尚江主筆、安部磯雄監督のもとにキリスト教社会主義、精神的社会主義を標榜する『新紀元』を発行して、折に触れ平和論・非戦論を発表していた。しかし社会主義者の合同の気運が高まり、それぞれ自ら雑誌を廃刊し、一九〇七年（明治四十年）一月十五日、日刊『平民新聞』が創刊された。同人として旧平民社の同人を殆んど集めたが、安部磯雄、木下尚江の二人はこれには参加しなかった。かくして一九一〇年（明治四十三年）夏の大逆事件によって、社会主義大弾圧の時代を迎えて大正期に入るのである。かつて日露戦争時に非戦論を展開したキリスト教社会主義者は、大正期になると『近代思想』の創刊号（大正元年十月号）で「もと社会主義者西川光次郎は、松村介石の道会に入り、あちこちで資本家の御ためになるような道法を、熱心に労働者に演説して聞かしている。」<sup>1)</sup> また、「三河村の聖者木下尚江は、岡田某の門に入って万能剂腹式呼吸の秘法を伝授され、このごろでは自宅や門人の家で大いに無免許医を興行しているゲナ」と<sup>2)</sup>、ヤツ当りの罵言を浴びせられる状態であった。さらに石川三四郎はフランスへ、また片山潜はアメリカへ亡命し、第一次世界大戦時においては、日露戦争時の非戦論の系譜をひくキリスト教社会主義者は安部磯雄一人ということになった。（安部の非戦論については、社会主義者の非戦論のなかにいて考察する。）

このように第一次世界大戦時に平民社系のキリスト者が総くずれにあるなかで、日露戦争時に独自に非戦論を提唱していた無教会主義者内村鑑三は、その後も『聖書之研究』にたてこもり非戦論を展開していた。また安中教会の牧師柏木義円も『上毛教界月報』の誌上に健筆を振っていたのである。一たび世界大戦が勃発するや、内村・柏木は敢然と正面から非戦論を唱えて、その健在ぶりを発揮する。まさに第一次世界大戦時において、キリスト者のなかで非戦論を展開した代表的な人物はこの二人につきるであろう。

内村・柏木の非戦論を考察するまえに、当時のキリスト者が第一次世界大戦をどのようにみていたかを描いてみよう。当時のキリスト者は第一次世界大戦をオートクラシーに対するデモクラシーの聖戦とみなしていたが、キリスト教国といわれるヨーロッパ諸国が武器をもってたたかい、互いに人を殺しあう、しかもその範囲がヨーロッパから全世界に波及していったことに大きなショックを受けた。青山学院長でメソヂストの指導者高木王太郎は「歐洲戦乱と基督教」のなかでつぎのようになる。

「世人の最も怪訝に堪へぬのは、今回の交戦国が何れも基督教国で、所謂兄弟の間柄であるといふことである。……抑も彼等基督教徒は何が故に兄弟相闘ぐであらうか。彼等は自ら基督教徒と称し、其文明に誇って居ったではないか。而して其自ら誇りし所の文明は、今や惨劇なる戦争に依て全く破産しつつあるではないか。去れば今日の所謂文明なるものを誠につまらぬものであると言って、所謂基督教文明に失望するものが少くない。中には又今日の交戦国が所謂基督教国であるといふ処から基督教の無力為すなきを論じ、果ては之を攻撃嘲罵するものさへある。昔予言者イゼキエルはイスラエル人民の不信を責め『神の名は爾曹に依て異邦人の中に汚されたり』と言ったことがあるが、我々も亦今日の歐洲人に向て斯く言ひたい。基督教の名は確かに所謂基督教国民に依て異邦人の中に汚されたのである。」

そしてさらに続けて、しかし我々はこれがために今日のキリスト教文明に全く失望すべきであろうか。今日のキリスト教国民が干戈をとって互にたたかう一事によって、直ちにキリスト教の無力を推断すべきではないという。なぜなら、今回の戦争はキリスト教文明の破産ではなく、物質本位、自己本位の文明すなわち反キリスト教的文明の破産である。反キリスト教的文明が精神的要素を全く度外視したことで、その結果が世界大動乱をおこすことになったといい、キリスト教の使命をつぎのように結ぶ。

「要するに今回の戦乱なるものは物質本位自己本位の近代文明の産物で、基督教文明の産物ではない。……今や戦争は開

始められ、歐洲國民は痛ましき鮮血に染められ、斯くして近代の物質文明は破産に瀕して居る。思ふに此戦争の結果軍国主義は倒れ、精神主義の文明は之に代つて起るであらう。換言すれば基督教の時代は過去に在るのではない、将来に在るのである。吾人は第二十二世紀に於て物質的文明と精神文明との衝突、国家主義と世界精神との矛盾を徹底的に解決せねばならぬ。是れ実に基督教の一大使命ではあるまいか。」(高木王太郎「歐洲戦乱と基督教」『日本及日本人』大正三年十一月一日号)

物質的文明と精神文明の衝突、オートクラシーとデモクラシーのたたかい、これが第一次世界大戦だという考え方は、当時の多くのキリスト者の感想であつた。だから問題の解決のためには戦争もいたしかたなく、その結果、戦後の平和に期待するというのが一般的な風潮であり、わが国の参戦も「日英同盟」がある以上参加せざるをえないという。ユニテリアンで統一基督教会の内ヶ崎作三郎は、『六合雜誌』に「大戦乱と文明」と題しつぎのようにいう。

「日本帝国は如何なる態度を此場合にとる可きであるか。吾人は平和論者である日本帝国が歐洲戦乱の渦中に巻き込まれることは、その欲せざるところであるが、併しながら日英同盟は敵として存在す。日本帝国は日英同盟の勢力を後援として日露戦争及韓国併合を成就した。已に英国と攻守同盟を結べる以上、英国を助くるは国民的道德を實行するに他ならぬことである。この同盟は果して日本帝国の理想なるや否やは別の問題である。吾人は平和論者なるも日本帝国をして國際的友情を無視せしむることは賛同することができない。日本帝国もし干戈をとらざるべからざる時はそれは三国干渉に於ける独逸の態度に復仇するためでなくして日英同盟といふ國際的友情の發露に外ならないのである。」(内ヶ崎作三郎「戦乱と文明」『六合雜誌』大正三年九月号)

このようなキリスト教界の雰囲気の中において、敢然と非戦論を主張したキリスト者として、まず内村鑑三の非戦論を考察していこう。内村の非戦論については、すでに多くの論者が紹介しているところであるが、内村の非戦論を大別すれば、前期の非戦論と後期の非戦論に分けることができる。前期の非戦論は日露戦争前から第一次世界大戦前までで、後期の非戦

論は第一次世界大戦時からその晩年までといえよう。内村の非戦論は、日清戦争によって目ざめ、日露戦争によって非戦論的無軍備主義となり、さらに第一次世界大戦によって宗教的な非戦論になった。すなわち内村の前期の非戦論は、楽天的、理想主義的な歴史観や道徳主義的平和主義の立場から展開されていたが、聖書の研究を通じて信仰的に深化されていき、後期の非戦論は、キリスト再臨を基調として形成されるにいたったのである。<sup>(3)</sup>

内村は日露戦争時、『万朝報』と『聖書之研究』において非戦論を発表していたが、万朝報社が主戦論にふみきったので、一九〇三年（明治三十六年）十月、「小生は日露開戦に同意することを以て日本国の滅亡に同意することと確信いたし候」と黒岩深香社長に書き送って万朝報社を辞去した。<sup>(4)</sup>キリスト教と社会主義のちがいを力説しながらも、堺利彦・幸徳秋水らの社会主義的非戦論とともに社会運動に参加していた内村は、日露開戦を契機として論壇から退き、もっぱら『聖書之研究』において非戦論を展開した。それは道徳主義的平和論であった。そして、「其定めし制度に由り、国民の義務として我儕にも兵役を命ずるに至らん乎、其時には我儕は涙を飲み、誤れる兄弟の難に赴くの思念を以て其命に従ふべきである」<sup>(5)</sup>し、これが戦争を廃止するにいたらしめるもっとも適当な途である、と国法の遵守を説き、自ら否定した戦争の犠牲となることによつて、自国のためというより全人類の罪悪の一部分なりとも贖うことになり、平和はこの世に近づくという。内村は、あえて兵役その他戦争への協力を一切拒否するという方法はとらなかつたのである。これは、平民法の同志が戦争中もあらゆる官憲の圧迫と経済的困窮にも耐えながら、非戦論を唱へ非戦運動を展開したのとは異なつた態度であつた。ともかく日露戦争から第一次世界大戦にいたる期間は、内村にとつては社会的発言をやめ、社会的接触の後退した時代であつた。しかし日露戦争時の非戦論は、内村自身にも意識されずして徐々に第一次世界大戦時の非戦論に次第に移行しつゝあつたといえよう。内村はこの間にも、「平和成る」<sup>(6)</sup>『新希望』明治三十八年十月号）、「日露戦争より余が受けし利益」<sup>(7)</sup>『新希望』明治三十八年十一月号）、「非戦論の原理」<sup>(8)</sup>『聖書之研究』明治四十一年八月号）、「キリスト教と法律問題」<sup>(9)</sup>『聖書之研究』明治四十三年五月号）、「世

界の平和は如何にして来る乎」『聖書之研究』明治四十四年九月号)などを発表しているが、その非戦論は、次第にきびしい終末論的立場より戦争と平和が神の歴史経綸の業として捉えられようとしている。日露戦争時の非戦論からの飛躍の背後には、娘ルツ子の死やアメリカの親友デヴィッド・クーパー・ベル(David C. Bell)のすすめによって内村が体得した再臨信仰があることはいうまでもない。<sup>6)</sup>

第一次世界大戦の勃発は、内村のキリスト教的戦争廃止論をさらに進展させられたというほどに、内村に大きな衝撃を与えた。内村は世界大戦は、いわゆるキリスト教国の背信、偽善、墮落にたいする神の刑罰であるとし、アモス書二章四―五節、三章二節を引用し、「戦争は悪事であると同時に刑罰である、負ける戦争ばかりではない、勝つ戦争も亦刑罰である。国家は戦争に従事して、負けるも勝つも神の刑罰を蒙りつつあるのである。」(『欧州の戦乱と基督教』『聖書之研究』大正三年十一月号)という戦争刑罰観が内村の非戦論のなかに強くあらわれる。そして、この時期にはイザヤの平和の預言の引用が多くみられるのも特徴的である。「ノアの大洪水を思ふ」(『聖書之研究』大正四年十二月号)という論文でも世界大戦の原因は、ノアの大洪水が臨みしと同一の原因によるとし、「此戦争を経済戦、又は商業戦、又は人類戦と見る者は其皮相を見るに過ぎない、神に対する民の叛逆に因て起りし戦争である」とする。また、内村は親友であるアメリカの実業家ベルに送った手紙の中でも「この欧州大戦は何んと怖ろしいではありませんか。これこそキリスト教国のキリストを忘れた物質文明に対する、神の慈愛の刑罰であると思います。しかしこの凡ての結果としてエホバはあがめらるるに至ると思えます。」(大正三年十月三十一日)としたためている。かくして内村は、日露戦争時は、戦争は聖書に示されている教えに反するがゆえに悪事であり、人類の戦争的性癖にもとづくものも考えていたが、こんどの戦争はそれのみならず、神に反逆する人間社会の罪として把握し、これを神の審判または刑罰として批判したのである。そして、日露戦争後主張して来た、平和の実現は神によってのみ可能であるという、神を具体的にはキリストの再臨と考えるようになった。すなわち戦争は、「主イエス・キリストが栄光

を以て天より頭はれ給ふ時にやみます。而してキリスト教の伝道なるものはこの時に応ずるための準備であります、この世の改良ではありません、人をしてキリスト降臨の時に備へしめんがためであります、而して戦争はキリスト再頭の確かな徴候であります、ゆゑに私共はすべての方法をつくして、この時にあたりて世の人にキリストの福音を伝へなければなりません」〔戦争と伝道〕『聖書之研究』大正三年一月号とのべ、また平和は神とキリストによって来るべきもので、人間によっては来らないという信仰的論理を展開する。まさに信仰的平和論ともいふべきものである。このキリスト再臨への期待が切実なものとして内村にうけとめられたのは、アメリカが世界大戦に参戦を宣告してからである。アメリカだけは戦争に参加せず交戦諸国間の調停をしてくれるであろうと期待していた内村を絶望に陥し入れた。「アメリカもまた参戦して、この暗い地球上にはも早一点の白いところも無くなってしまいました。私は信じます。交戦諸国に武器弾薬を売って巨額の金をもうけるという罪悪をおかし来ったアメリカは、こうして今や自分を自分の手で罰しているのである」〔大正六年四月十一日〕と、べルに書き送っている。

内村の非戦論は無教会主義に結びつき、教会と戦争謳歌を不可分離とみ、教会の戦争主義を攻撃した〔教会と戦争〕『聖書之研究』大正六年八月号〕そして、内村の信仰的平和論は、人類最後の大審判戦争観とかゝわりあい、万物の破滅が終末でなく、破滅をへて大光明大栄光があり万物の復興が来る。これはキリストの再臨によって実現する。したがってこの戦争は惨事であるが、神の経綸の歴史からすれば大いなる福音の到来が間近にあることを告げる予徴である〔欧州戦争と基督教〕『聖書之研究』大正五年九月号〕と説く。また内村は世界平和のため、アメリカのウイilson (Woodrow J. Wilson) によって提唱された国際連盟にたいしても最初から不信の意を表明した〔聯盟と暗黒〕『聖書之研究』大正八年五月号。キリスト教界が戦後の国際連盟に両手を挙げて賛成し、代表団をアメリカに送ってまで運動する状態に批判の矢を向けたのである。

このように内村は、世界平和や社会改良や民主主義について、人為を排し、もっぱら神意によるべきことを主張し、福音、



終末、再臨などが神意の現実と解するのである。(「戦争廃止に関する聖書の明示」『聖書之研究』大正六年七月号) このように内村の第一次世界大戦時の非戦論は、日露戦争時と比べて、超越的終末論的である点の特徴であり、キリストの再臨による神の平和を待ち望んだのであり、まさに信仰的平和論であり、非戦論者内村の辿りついた最後の解答であったといえよう。しかし、第一次世界大戦中には彼の非戦論も、再臨運動という形をとって一部の信者の支持をうるのみで、現実の戦争を阻止するという役割を果すところの運動にはなりえなかったのである。しかし、後年内村の影響をうけた人々のなかから、矢内原忠雄をはじめ多くの無教会キリスト者たちが、日中戦争、第二次世界大戦中に戦争反対を唱えて、国家権力に抵抗を行なったことは記憶しておくべきことである。

第一次世界大戦時において、非戦論を唱えたもう一人のキリスト者として、柏木義円についての研究は、ようやく最近になって進められている状態である。内村と柏木は同世代人であるが、内村の名は普及し、その生涯も思想もよく知られているのにくらべて、柏木の生涯と思想は知る人が少ない。柏木は新島襄の同志社に学んで、同志社に在職したのち、短い熊本在任の期間を除いて、一八九七年(明治三十年)から一九二四年(昭和十三年)まで、群馬県安中町の安中教会の牧師として生涯を送った人である。内村は中央の宗教家として、イデオログとして存在したが、柏木は安中という小さな町の牧師に徹して日夜伝道に明け暮れた。また柏木は『上毛教界月報』という、小さな新聞を月刊で発行しつづけて、実に四〇年間、四六〇号を数える。この新聞は一貫した非戦の思想で貫かれ、キリスト教界の新聞としては、実にユニークな存在であった。

柏木は内村と同じく、日清戦争時は主戦論を唱えていた。一八九四年(明治二十七年)八月・九月の『同志社文学』に「戦争と平和」(第七九号)、『再び戦争と平和を論じ併せて宣教師諸君に一言す』(第八〇号)という巻頭論文を掲げ熱のこもった主戦論を展開した。柏木が非戦論を主張したのは一九〇三年(明治三十六年)八月がはじめてである。『上毛教界月報』に「非戦論、国是論」を書き、つぎのようという。

「今日開戦を主張する者は軍国的精神を以て我國是の根底となし國民の自由と權利と安寧と幸福と内治の改善とを犠牲とし國民をして平時は軍費を造くるの器械たらしめ戦時は國家の爲めてふ名と無理情死するの一種の奴隸たらしむる覚悟なかる可らざる也先づ我國民をして特に中等社會をして各自理想ある國民たらしめよ個人として品性あり実力ある民たらしめよ而して國民として大理想を立てしめ之に由て東洋を教化するを以て我國家の天職と確信せしめよ而して品性と実力とに依て自然に平和的の膨張を爲さしめよ」(『上毛教界月報』明治三十六年八月号)

さらに柏木は、世界の大勢は文明の膨張、國家の拡張にあるが、ロシアの滿州進出に依じてわが國が軍備を拡大してゆけば、かならずや國民經濟の破綻をまねくから、わが國はあくまでも平和を國是として、品性をもって東洋を教化すべきであると論じ、「今日の理由の如き理由の爲に戦はるゝ戦争の爲に戦勝を祈るの教會あらば實に教會の名をはずかしむるものと言はざるを得ざる也」と、当時のキリスト教界の主流に批判を加えている。柏木はトルストイ (Lev Nikolaevich Tolstoj) の非戦論に感化をうけること大きく、毎号のように『月報』にトルストイの非戦論を紹介している。

このように、日露戦争時に非戦論を展開した柏木は、第一次世界大戦時にも依然として非戦の思想を主張する。『上毛教界月報』一九一一年(大正三年九月)に、はやくも「欧州の大戦乱に就て」という一文を草し大戦を批判する。すなわち、軍備拡張論者はみな軍備は平和のためなりというが、今日ほどその軍備が絶大となったときはない。こんどの大戦はオーストリアの背後に平和の擁護者と称するドイツの挑発がある。わが國も日清、日露の戦争に際して朝鮮の独立と東洋平和のためといいながら、朝鮮を併合し、戦後ますます軍備を拡張して愛國心や戦争熱をあおっている。これらはまことに遺憾であり、いまこそ平和思想を鼓吹しなければならぬと主張するのである。

また、同じ号の「雞肋漫筆」のなかに「平時には平和を唱へ戦時には輒ち戦争を謳歌するが如き此れ操守なきの徒である平和主義者亦平和の爲に死する覚悟を以て世界の平和を来らす爲に努力しなければならぬ」とのべつついて「如何にして

平和を来らす可きか」として、「絶対的平和主義を執て身を以て之に殉することである若し基督をして近世國家に在らしめたならば國民の義務として鋭劍を執て起て人の子を突き殺し玉ふたであらふか否、否、否必ずや非國民也との罵声の下に十字架否な銃殺されて平和を叫び玉ふたであらふと思ふ而して此れ人心より戦争の念を全く驅逐して平和の思想を世界に充たす所以である」と、絶対平和主義を主張している。その後もほとんど毎号にわたって『上毛教界月報』に彼の平和主義は主張されている。「戦時の祈禱」（大正三年十月号）、「絶対非戦論」（大正三年十一月号）、「戦争何の世にか熄まん」（大正三年十二月号）、「戦争と平和」（大正四年四月号）などがそうであり、とくに「軍備拡張反対」（大正四年二月号）においては、つぎのように當時の大隈内閣が計画していた二箇師団増設に反対する。

「吾人は軍備に関する根本主義に於て何れの党派にも左祖し得る者に非らず然れども差し当り軍備拡張案を提出する者は吾人の敵也吾人は此の意味に於て敢て大隈内閣の崩壊を望む而して政友会が取て代て軍備拡張案を提出せば亦其内閣も倒壊せんことを望む也苟くも軍備拡張案を提出する内閣は悉く破壊せられんことを望む也若し海陸軍にして軍備拡張案を提出せざる内閣を内より破壊せば國民は軍備拡張案を提出する内閣を外より破壊し去る可き也陸海軍勝つか國民勝つかこれ國運の決する一大危機也永く我國家を誤るものは東洋に第二の独逸を起さんとする輩也独逸思想と頑冥なる神道思想と軍國主義の抱合これ実に危険也我國民は知らずく此の思想にかぶれ居るに非ざるか深く國民の反省醒覚を望む」

挙国一致が提唱されているときに、このような激烈な軍備拡張反対論を主張したのは、まさに柏木一人であったといえる。

なお柏木は「非戦主義に殉ぜし名士」（大正五年九月号）において、イギリスの平和主義者ノーマン・エンゼル（Sir Ralph Nernam Angel）が、兵役拒否して一カ年の懲役に処せられたことに関連して「平時平和論を主張し乍ら戦時敵愾の気漲るに至れば輒ち之に調子を合はずなど其の平和論に何の権威があらふ世は兵役忌避と云はゞ云へ戦の為にさへ滔々殉する者あるではないか更に高尚にして真に人間の道なる平和の為に殉ずるは因とより國土の甘んじて為す可き所ではあるまいか直諫

の功は一番鎗に勝ると云つてある戦時に於ける非戦論は正にこれ国民に対する直諫ではないか」といふ、口先きのみの平和論はなんにもならない、エンゼルが主義のために殉じたのをみて、「英国に此人あるを英国の為に祝し併せて世界の平和の為に祝するのである」と結んでゐる。

ところで、第一次世界大戦時における内村と柏木の非戦論の違いは、同じキリスト者でありながら、内村は社会の現実を無視して、平和というものは人為によつて達成されるものでなく、神の意思すなわちキリストの再臨によつてのみ可能だといふ信仰的平和論であるのに反して、柏木は、社会の現実認識のうえに立つて宗教的観点から絶対非戦の立場を貫いた点である。一九一七年（大正六年）八月の『月報』には「戦争に対する吾人の態度」といふ論説を発表しそのなかでつぎのように説く。

「唯愛國の至誠よりする戦争に至つては是れ時を濟ふ止むを得ざるの挙と認むるを得可きか然れども万世を濟ふ永遠の正道に至つては非戦論にありと謂はざるを得ざるなり而して一時を濟ふは此れ政治家の事にして宗教家の天職は万世永遠の救済に在り非戦論を主張するは正しく是れ宗教家の一大任務なるなり」（『上毛教界月報』第二二五号）

柏木は一時の救済と永遠の救済という言葉で、現実の平和と永遠の平和を区別して、現実の平和を実現するのは政治家の任務であつて、宗教家は永遠の平和を唱へ絶対非戦の立場を主張しなければならないといふ<sup>10)</sup>。このように柏木は宗教的信念にたちつつ、社会科学的な現実認識をもつて非戦論を展開したのである。したがつて、現実の社会の諸問題、例えば、廃娼問題、普通選挙問題、朝鮮伝道批判、軍縮問題などについても、『月報』紙上で論じてるのである。この柏木の非戦論は、生涯貫かれ、一九二五年（大正十四年）一二月の『月報』から「本紙の主張」と題する七カ条が表紙の下段に掲げられるが、その中の一つに「一、われらは無戦世界の実現を望み軍国主義の廢滅を期す。」と謳われている。

第一次世界大戦時における柏木の非戦論は、内村のキリスト再臨による平和論よりは、キリスト者のなかに浸透する可能

性を秘めてはいたが、柏木が中央の宗教界の雄ではなく、安中という一つの地域で発行していた『月報』の及ぶ範囲においてのみの影響力しかもちえなかつたことは残念であるといえる。しかし彼によって受洗したキリスト者のなから、一九二三年（大十二年）には軍籍離脱届を提出した須田清基（註）が出たというのは、やはり柏木の非戦論の影響であつたといえよう。

以上、第一次世界大戦をめぐる非戦論を展開したキリスト者として、内村鑑三と柏木義円を紹介してきたのであるが、つぎに論ずる社会主義者の非戦論に比べれば、大逆事件の悪夢に影響されない関係もあつて、日露戦争時の非戦論がそのまゝ受け継がれ、さらに深化されていることが特徴である。例えば柏木義円は、日露戦争が開戦となつた段階で「吾人暫らく我國民と共に護国の責を尽くさざる可らざるなり然れども吾人は決して戦争に賛同する者に非るなり吾人は終始此態度を維持しつゝ護国の責を尽くさんことを欲す」（『戦争に対する吾人の態度』『上毛教界月報』明治三十七年三月号）という程度のものであつたが、第一次世界大戦時になると非戦主義に殉じてこそ、そしてこのような犠牲の積み重ねによつてこそ、始めて人心が覚醒して世界平和の曙光がみえるところのようになる。「平和主義の為に殉ずる者は臆病なる非國民として罵辱せらるると雖も人の國の為に人々相屠て死すよりも神の國の爲め平和の為に死するは遙に高貴に非ずや世界の宗教家は斯主義の為に殉ずるの覚悟を以て断乎たる態度を以て非戦論を唱道す可きなり……永遠の平和は必ず来らん苟くも宗教家は戦争を否認せよ生命を賭しても否認せよ人間の國家であり乍ら爪牙の鋭きに誇るを恥ぢしめよ軍備に由て世界の一等國の列に班するを誇るを恥ぢしめよ」（『戦争に対する吾人の態度』『上毛教界月報』大正六年八月号）。同じ「戦争に対する吾人の態度」というテーマで論じて、日露戦争時と第一次世界大戦時の非戦論では、このような違いがあらわれているのである。しかし、このようなキリスト者の非戦論が提唱されても、わが國の國民は、日露戦争時と違って、第一次世界大戦が、わが國の命運をかけた戦争ではなく、戦争気分にはたれないということもあつて、一般の國民はもちろんのこと、キリスト教徒のなかへさえも余り浸透はしなかつたのである。

またドイツの思想史家 E・トレルチ (Ernst Troeltsch) の類型化によれば、平和主義の団体は教会型ではなくて教派型の集団にならざるをえないという<sup>12)</sup>。確かに教会は世界的な規模をもつ機構であり、制度である。そのため国家や社会体制との妥協を避けることはできず、社会の上層部に依存している。これはわが国のキリスト教界が、日清戦争時から天皇制と妥協し、積極的に戦争を合理化し「正義の戦争」という名のもとに戦争の協力者となったことでも証明できる。これに対して教派は小さなグループで、個人の内的な完成と相互の人格的な交りを目的としており、下層階級、あるいは国家や体制と対立する階層と関係している。わが国のキリスト者で日清戦争以後非戦論を唱えたのは、フレンド派の北村透谷、無教会主義の内村鑑三、キリスト教社会主義の安部磯雄、木下尚江などは、この教派型グループにはいるであろう。また柏木義円は教会に属してはいるが、地方にあって『上毛教界月報』という月刊紙にとじこもって非戦論を展開した点で、教会型と教派型の中間に属するといえよう。

したがって、第一次世界大戦においても、キリスト者の多くは教会型に属するため、非戦論を唱えることができず、教派型に属する内村鑑三、安部磯雄（社会主義者として後で論ずる）および中間型の柏木義円などが非戦論を展開することとなるのもキリスト教界のもつ体質からである。しかしながら、トレルチもいのように、教派型グループは、教会型のよりに多くの人間を組織して政治的影響力を及ぼすことは不適當で、少数派としての政治的役割を果すほかにないのである。だから内村の非戦論は、無教会主義者のなかでキリスト再臨運動として展開され、また柏木の非戦論は、安中地方の『上毛教界月報』の範囲内のみに終るといふ結果にならざるをえないのである。

とはいえ、日露戦争時から第一次世界大戦時において、かくも徹底した非戦論を展開した内村鑑三、柏木義円の名は、わが国の平和主義思想史のうえに永久に光り輝いて残るであろう。

(1) 西川光次郎は、札幌農学校・東京専門学校に学んだのち『毎日新聞』、『労働世界』、『二六新報』などの記者となったが、わが国の最

初の社会主義政党である社会民主党結成のさいの発起人の一人であり、その後平民社に入った議會政策派であった。凶徒囂集（しょうしゅう）事件で、明治四十三年秋出獄してきた西川は、いわゆる転向のハシリといわれる「心懐語」を書いて、社会主義陣列を離れていき明治末年には非戦論者ではなかったといえよう。

(2) 木下尚江は、東京専門学校卒業後、『信府日報』の主筆をつとめ、のち弁護士となったが、『毎日新聞』の記者となつて、社会主義運動に参加し、社会民主党の結成、平民社などに入ったキリスト教社会主義者であった。『新紀元』廃刊後（明治四十年頃）、日本の前途に失望し、運動から離れた。その後、伊香保山中に隠遁し、岡田式静庵法に擬つたりしていた。木下は『週刊平民新聞』時代から論客として知られ、彼の著『火の柱』は日露戦争当時、非戦論のために大きな役割を果たしたが、明治末年には非戦論は唱えなくなつていた。

(3) 土肥昭夫『内村鑑三』一四三ページ、田畑忍『内村鑑三の戦争と平和にかんする政治思想』（『キリスト教と社会問題』所収）一〇二ページ。

(4) 内村鑑三「朝報社退社に際し涙香兄に贈りし覚書」『万朝報』（明治三十六年十月十二日号）。

(5) 内村鑑三「非戦主義者の死」『聖書之研究』（明治三十七年十月号）。

(6) 土肥昭夫『前掲書』一四九ページ。

(7) 山本泰次郎訳補『内村鑑三ベルにおくつた自叙伝的書翰』二九二ページ。

(8) 山本泰次郎訳補『前掲書』三四〇ページ。

(9) 柏木義円については、伊谷隆一『非戦の思想』参照。

(10) 笠原芳光「柏木義円」（『同志社の思想家たち』所収）六五ページ。

(11) 須田清基については、伊谷隆一『前掲書』参照。

(12) Ernst Troeltsch, Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen, Tübingen, 1912. S. 360-377.

なお、笠原芳光「個人キリスト者の抵抗」(『戦時下抵抗の研究Ⅱ』所収)参照。

(13) トレルチは、教会型と教派型に分類しているが、これを縦の分類とすれば、都会型と地方型という横の分類も必要ではなからうか。柏木義円の場合、教会型と教派型の間中に属して、そのうえに地方型という形をとるので、教会に属しながらも教派型に近い存在となる。したがって平和主義の思想が芽生えるということも考えられるのではなからうか。

#### 四、社会主義者の非戦論

日露戦争前に開戦論に転向した『万朝報』を去り、『平民新聞』を創刊（明治三十六年十一月十五日）して、断固反戦の陣を張った堺利彦・幸徳秋水などの平民社グループについては、明治社会主義運動の記念碑的な存在として、すでに多くの論者がのべるところである。日露戦争時の非戦と平和の思想と運動の流れは、内村鑑三と柏木義門を除いては、平民社を中核とする非戦運動に結集した。また、この時期の社会主義運動は、平民社を中心とする非戦運動としてあらわれた。『平民新聞』の創刊号には、五カ条の宣言をかゝげ「平民主義」「社会主義」とともに「平和主義」の主張、すなわち「吾人は人類をして博愛の道を尽さんがために平和主義を唱道す、故に人種の区別、政体の異同を問はず、世界を挙げて軍備を撤去し、戦争を禁絶せんことを期す」と謳って、平民社の反戦の立場を宣言した。

『平民新聞』は、一九〇四年（明治三十七年）一月一七日の第一〇号にいたって、がぜん従来の微温的態度をかなぐりすて「吾人は飽くまで戦争を非認する」という社説をかゝげ、ほとんど全紙を挙げて非戦論を高唱した。開戦中もあくまで戦争反対を叫びつづけたが、こゝでは多くを論じない。日本中が戦勝にわきたっているなかで、あくまで非戦論を展開する平民社の活動には、あいつぐ弾圧が加えられ、ついに一九〇五年（明治三十八年一月二十九日）『平民新聞』第六四号は、「微力なる平民新聞はすでに刀折れ矢尽きてその守を失へり」との「終刊の辞」をのせ廃刊を宣言するにいたった。平民社は、『平民新聞』にかわって週刊紙『直言』を発行し続けたが、創立後滿二年の一九〇五年（明治三十八年）一〇月九日、平民社は「花々しい奮斗の生涯を終るべく悲壮なる解散式を行」<sup>(1)</sup>なったのである。その後、マルクス派社会主義者は『光』をキリスト教社会主義者は『新紀元』を発行し、さらに両者が合同して一九〇七年（明治四十年）一月十五日、日刊『平民新聞』を創刊したことはすでにのべたとおりである。しかし、日本社会党第二回大会の直接行動派と議会政策派の分裂は、日本社会党の解



散、『平民新聞』の発行停止という弾圧によって打撃をうけた。かくして明治の社会主義運動は分裂状態のまま、しだいに沈滞していった。そのなかで直接行動派は、一九〇八年（明治四十一年）六月二日、赤旗事件をひきおこし、赤旗事件をきっかけとして強まった弾圧は、社会主義運動の勢力をいちじるしく弱めてしまった。<sup>2)</sup> そのうえ、一九一〇年（明治四十三年）五・六月の大逆事件によって、社会主義運動は、分裂衰退のまま「冬の時代」を迎え、大正の時代に入ることとなった。

ところで、明治社会主義者の平民社の非戦運動の伝統は、どのようにして受け継がれたであろうか。ここでは、第一次世界大戦をめぐる社会主義者の非戦論として、安部磯雄、大杉栄・荒畑寒村の『近代思想』、堺利彦・山川均の『新社会』などの非戦論をとりあげて考察してみよう。

日露戦争時、平民社によって非戦運動にたずさわっていたキリスト教社会主義者の論客たちは、しだいに脱落していき大正の時代になっても健在ぶりを発揮したのは安部磯雄のみであった。安部は、かつての平民社グループとは、一九〇七年（明治四十年）頃から一定の距離を保っていた。安部は、一九〇一年（明治三十四年）五月二十日、社会民主党結成（即日結党禁止）のため、彼が起草した理想綱領のなかに、「万国の平和を来す為に、先づ軍備を全廃すること」をかかげ、彼の平和思想を明らかにしている。さらに一九〇三年（明治三十六年）一月八日の社会主義協会第一回非戦論演説会で「露国内部の潮流をみよ」と題し、そのなかでロシアの崩壊を予言し、むしろ軍備に金を費す位ならボルシェビキに資金を送った方がよいと断言し、また一〇月二〇日の第二回非戦論演説会では、「世界の平和境スイスについて」と題し、非軍備国スイスの事情を説いたのち、「若し平和が人道であるならば、平和を世界に宣言して、それがため一国が亡んでも、何悔ゆるに及ばないではないか。」<sup>3)</sup>と結び、絶対平和、無抵抗主義を提唱したのである。翌年五月には、『地上の理想国端西』を平民文庫として刊行した。また『六合雜誌』の二月号には、社論として「基督教と非戦論」<sup>4)</sup>を書き、「基督の教訓中に戦争を是認するが如き句あるは如何に解釈すべきか」とのべ、それはキリストの真意を誤り伝へたもので、キリストの戦争観は「爾の剣を故処

に収よ、凡て剣をとる者は剣にて亡ぶべし」と云ったところにあると思うと、のべているのである。このような日露戦争時の非戦論は、大正の時代にまでもちこされる。

安部は、一九一二年（大正元年）九月、イギリスの政治・経済評論家ノーマン・エンゼン（Sir Ralph Noman Angell）の名著『大いなる幻影』（The Great Illusion, 1909）を訳し『現代戦争論―兵力と国利の関係―』と題して博文館から刊行した。ノーマンは、時あたかも第一次世界大戦の前夜で、列強の帝国主義政策が戦争の原因を醸成しつつあるときにこの書を著わした。ここでの主張は、戦争が不可能だということではない、戦争は無益だという。戦争は完全に勝つと分っている時ですら、道徳的・物売の利益をもたらさないとして、戦争に関する政治的・経済的幻想を打破しようとしたのであり、軍備と戦争の問題の解決は、この真理の一般的認識にかかっていると説く。この平和論は、レーニンの『帝国主義論』にみられるような、戦争原因に対するシャープな経済分析はみられないが、戦争は、勝者にも利益をもたらすものでないことを証明することによって、戦争に対する幻想を打破しようとしたものである。そして、戦争に対する幻想より人々を覚醒することによって、さらに積極的には、ヨーロッパ諸国に平和的世論を醸成することにより、戦争は防止しようと考えたのである。事実この書は出版後一年にして十カ国のヨーロッパ語に翻訳され、ヨーロッパ諸国の賞讃をえた書物であった。安部はこの書を翻訳し、大正初期のわが国の非戦熱に大きな力を与えたのである。しかしながら安部は、ノーマンの平和論に満足はしていなかった。一九一三年（大正二年）一月二五日、早稲田大学第一〇回政治学会において「ノーマン・エンゼンの『現代戦争論』について研究発表をしたが、そのさいノーマンが絶対平和主義を主張しなかったことを惜しんでいるのである。しかしノーマンは、第一次世界大戦が始まるとすでにのべたように、徴兵拒否を行ない懲役一カ年半の刑を受けるといように自分の主義に殉じた非戦論者であった。

安部は第一次世界大戦が始まる前は、このような形で非戦論を展開していたのであるが、他の社会主義者はどうであった

であろうか。

一九一〇年(明治四十三年)九月、大逆事件の幸徳秋水らと入れちがいに、赤旗事件により二年の刑期を終えて千葉刑務所を出獄した堺利彦は、官憲の苛酷な弾圧から身を守り、しばらく待機するしかないと判断して、売文によって生計を支えようと考えていた。一月に出獄してきた大杉栄・荒畑寒村・高島素之らを社員として、十二月三十一日「売文社」を開業した。<sup>(8)</sup>堺は「冬の時代」の社会主義者の指導者として、柔軟な思考と強靱な思想の持主であった。当時の生き残りの社会主義者にとって売文社は唯一の糾合の中心となって自重していた。しかし、明治から大正へと時代が移り変ると、アナルコ・サンジカリストの大杉・荒畑は、堺の待機主義に不満をもち、売文社を出て、一九二二年(大正元年)一〇月、月刊文芸誌『近代思想』を発刊した。<sup>(9)</sup>しかし所詮『近代思想』は、大杉のいうように知識の手淫にすぎない文芸的な娯楽物であった。『近代思想』は途中休刊したが、前後三年余の生命を保っている。この間、非戦・非軍的なものはないが、たゞ一つ、『万朝報』記者佐藤緑葉によって、ウイルヘルム・ラムズズス(Wilhelm Lanzsus)の『人間屠殺所』(Das Menschenschlachthaus, 1910)が全訳連載され、非戦文学として高く評価されたことである。『近代思想』の一九二三年(大正二年)八月号に、まず紹介がされ、『近代思想』(大正三年一月号・四月号)に連載されたのち、単行本として泰平館書店より出版(大正三年五月)されたが、さきの安部訳のノーマンの『現代戦争論』とともに、大正初期に大きな非戦熱を与えた書物であった。

ラムズズスはこの著のなかでのべたことは、近代の戦争は人間と機械との争斗である。人と人とがある少数者の功名心のために殺しあう事さえ言語道断であるのに、今では人と機械とが恐るべき斗いをなして、尊むべき血と肉とはマシンのために四分五裂の惨怛たる目に会い、化学研究室のみ冷やかな勝利の笑いをもらすという内容である。この『人間屠殺所』は近代戦争の恐怖を書いたもので、功名心の強いドイツ皇帝のミリタリズムに反対し、同時に世界の平和を主張している。この原書は発行後三カ月にして、ヨーロッパの八カ国に翻訳され、ドイツ皇帝カイゼルを周章狼狽せしめ、出版後三カ月にカイ

ゼルの名によって発売禁止を命ぜられ、著者ラムズズスは、ある公立学校の校長であったが、その職を免ぜられた。しかし、ドイツ国内で発売禁止までにすでに十万部を売りつくしていたという。そしてこの書は非戦文学として世界で高く評価され、一九二二年（大正元年）スイスのジュネーブで開かれた第一四回万国平和会議で、著者に感謝状を送るほどに、各国の非戦主義者に与えた影響は大きかったのである。<sup>(10)</sup>

『近代思想』は、「知識階級の間に宣伝する事の殆んど無駄な事を悟って……僕等の本来に帰るんだと言って、別に労働者相手の『平民新聞』を創めた<sup>(11)</sup>」と大杉が自叙伝にのべているように、わが国が第一次世界大戦へ参戦した翌年（大正三年九月）に廃刊された。つづいて、大杉と荒畑は、月刊『平民新聞』を一九一四年（大正四年）一〇月から翌年三月まで発行した。

一方、堺利彦を中心とするマルクス主義者たちは、一九一四年（大正三年）一月から月刊文芸誌『へちまの花』を発行し、翌年九月から『へちまの花』を改題し、『新社会』として「小さき旗上げ」をするのであるが、『へちまの花』時代は非戦論は絶無であった。たゞ、戦時人物絵葉書を売文社発行として売り出したのみである。この絵葉書は、「責めて此頃の心やりにこんな物を拵へて見ました」として、第一次世界大戦にさいし、猛烈な非戦運動を試みて暗殺されたフランス社会党首領ジャン・ショレース（Leon J. Jaurès）と、ドイツ社会党のなかにあってあくまで戦争反対の態度を堅持しているカール・リープクネヒト（Karl Liebknecht）とローザ・ルクセンブルク（Rosa Luxemburg）の三人を一組として八銭で売り出し、これら勇敢な非戦の戦士にたいする欽慕の情を示しているのである。<sup>(12)</sup>

ところで、これらの社会主義者たちは、第一次世界大戦が勃発（大正三年七月二十八日）し、わが国が参戦（大正三年八月二十三日）したときどのような反応をあらわしたであろうか。まず一番さきに意見を發表したのは安部で、『六合雑誌』（大正三年九月号）に「戦争は何時まで続き得るか——労働問題から見て——」と題して、専門の立場から、労働者はなぜ戦争に反対す

るか、労働者は明白な反対の理由をもって居るのであるとつぎの三点を挙げている。

「その第一に数ふ可きは、戦争は労働者に利益を与へないことである。禍を受けても経済上の利益を彼等が受けた例がない。……戦争は常に苦き経験を彼等に与へて居る。……労働者から見れば戦争は金持が自分等の利益の爲に行つて居るやうに思ふ。

第二は国民の思想が變つて来て居ることである。現今欧州の交戦国は二つの階級に分れる傾きがある。一は資本家等の権力階級で、他は貧民階級である。此の区別の著しくなつた今日、疑はしくなつたのは欧州諸国民の愛国心である。国の境界以上に前二者の境界は甚だしいのである。……正直なところ欧州各国の労働者は皆連絡して共通の敵たる権力階級に当りたいのである。今日では国を愛することよりも階級を愛する心が強いやうに思はれるのである。

第三に労働者の見る戦争は、之ある度に政治に於ける自由平等主義が退歩して、武断政治が跋扈することである。……軍備を拡張すれば、平民階級の平和と自由とを破壊する。加之一般に権力階級は軍備拡張によつて外敵を防ぐと云へど、労働者階級は之を目して、権力階級が同時に内敵を防ぐためだと見る。吾人が租税を払つて養ふ軍隊は、他日自分等に圧迫を加ふるものと見る。彼等は之を恐れるのである。」

安部は直接わが国の労働階級の戦争反対の理由をのべるのではなく、ヨーロッパの労働階級のことを論じて、非戦論を展開している。また労働階級のインターナシヨナルな非戦運動に期待をかけているが、現実には第二インターナシヨナルの指導者たちは開戦前は非戦を主張しながら、一端戦争がはじまるや非戦の旗を下して祖国擁護に転じていたのである。安部はつゞいて『中央公論』一一月号の「大戦後に於ける平和論」では、今日の様な大戦乱の最中では欧州における平和論も全く沈黙を守らざるを得ないのであるが、これは決して平和主義の無力を証明しているのではない。すでに國家が劍を抜いてしまつた以上これをとめることは容易でないから、平和論者はやむなく声を潜めてそのときのくるのを待っているのである

とし、「今日でこそ国家は殆んど挙国一致で戦って居るけれども、国民の多数が平常平和主義者であることは何人も疑ふことの出来ぬ事実である。……今日の戦争を予防し得なかつた平和運動者は戦後に於て実に花々敷く活躍を試みるであらうと思ふ。」と、ここでもやはり、日本の平和運動でなく、ヨーロッパの平和運動をのべ、それも現在でなく戦後の平和運動に期待をかけるのである。安部は、ヨーロッパの社会主義運動から一転して祖国擁護に変わったにもかゝらず、依然として、社会主義者、労働階級に期待をかけているのである。レーニン (Nikolai I. Lenin) は、「ヨーロッパ諸国の社会主義者が転換するのをみて「社会排外主義は完成された日和見主義である」と規定して、ロシアのボルシェヴィキを非戦から帝国主義戦争を内乱へと一歩前進させたのと比較するならば、社会民主主義者安部の限界を知ることができる。

さらに安部は、『実業之世界』（大正四年一月号）にも「戦後の欧州と日本の労働界」と題し、今度の戦争によって、最も被害を蒙った者は何といつても労働者が一番である。平和論者のこの労働者が戦後いかなる態度をとるか大いに注目すべきであるとし、「戦後の欧州世界は少数の権力者対多数労働者の拮抗対立となるであらうと思はれる。而して労働者に取つては斯くする事（政権を労働者の手に収めること……引用者）に依つて一面戦争を防止し、他面自己の主張を徹するといふ、一挙兩得の策である。」とのべる。

このように、言論の発表の自由と発表の場をもつ社会主義者であつた安部は、自己の信念である絶対平和主義を秘めながら、直接わが国の現状を論ずるのではなく、ヨーロッパの労働階級の、しかも戦後のあり方をのべることによって自己の期待を表明するという方法をとリ、孤軍奮斗したというべきである。

では他の社会主義者はどうだろうか。大杉と荒畑は、『近代思想』を廃刊して、一九一四年（大正三年）一〇月ついに月刊『平民新聞』を発刊した。『平民新聞』は、保証金を納めて時事問題を取りあげることができるとして社会主義者にとつて「冬の時代」最初の政治機関誌として登場した。だがこの新聞は、一九一五年（大正四年）三月の第六号をもって廃刊をよぎなくされ

た。何故なら、第一号から第六号までの間に四号をのぞいては、全部発売禁止を受けたのである。『平民新聞』は、論説、外国時事、内国時事などで非戦論を展開した。創刊号（大正三年十月十五日）には、「労働者の解放は労働者自らの仕事でなくてはならぬ」と謳い、「挙国一致の失業」と題してつぎのようについて。

「戦争開始以来、労働者の職に離るるもの、貧民の物価騰貴に悩むもの、日を追ふて激甚を加へ惨状を増して居る。……見よ、欧州戦乱勃発して未だ百日を経ず日独開戦以来六〇日にも充たないのに、平民労働者の嘗めた苦痛は既に斯の如く大きい。ああ資本家は挙国一致戦争に依り金を儲け財産を富すべし。労働者は挙国一致、戦争の為に業を失ひ職に離れて飢凍に苦しむのである。」

挙国一致戦争によって失業する労働者の現状を、いくつかの例をあげてのべ、だからこそ戦争は反対すべきだと訴える。

また「外国時事」欄では「戦争に対する戦争」と題し、「今回の大戦乱が將に起らんとする時、僕等の期待は、此の国際戦争に対する各国労働者の反乱にあった。動員若しくは宣戦に先だつ大示威運動！ 次いで総同盟罷工！ そして遂に社会的大革命！ 僕等はそんな事まで夢みていた。……そして僕等は、只だ此の時機に際して国際戦争の不道理と、又斯くの如き不道理を生ぜしめる今日の社会組織とに就いて、多数労働者の自覚を叫ぶ外に、殆んど為すべき方法をも見出さず、且つ此の為さざる可らざる事すらも猶十分になし得ないのを、甚だ恥辱に感ずる。」と評して、社会主義者としての自分たちが充分に運動ができない苛立ちをのべている。創刊号には、この外、堺利彦が「戦後はどうなる」を執筆しているが、非戦論文評論で満たされた創刊号は、たちまちにして発禁をくらうのである。第二号（大正三年十一月十五日）の「内国時事」欄では「軍備また拡張」と題し「久しく紛議を重ねて来た二個師団増設、及び海軍拡張問題は、戦争開始と同時に再び火の手を揚げ、軍事当局者は『挙国一致』の武器を振り翳して無理押付けに防務会議を通過し、近く予算閣議を経て次期議会に提出する筈である。……咄、平民階級の吸血鬼たる軍備拡張！」とわが国の軍備拡張に反対を表明したがこの第二号に続いて第三

号も発禁になった。ついに大杉らは苦肉の策として、第四号（大正四年一月十五日）は、転載号として他誌に発表された非戦的な論文をのせて発行し、司法大臣尾崎行雄の手前もあってこの号だけは発禁をまぬがれた。すなわち司法大臣尾崎行雄の「欧州時局観」（『東京朝日新聞』一月四日号）を巻頭にのせ、永田星岡「戦乱中に於ける欧米の所謂不平等党」（『日本及日本人』一月号）、さきに紹介した安部磯雄の「戦後の欧州と日本の労働界」（『実業之日本』一月号）、川合貞一「戦争哲学」（『日本及日本人』一月号）などを収録した。これらの論文は当時の論壇にあっては、消極的ながらも良心的な非戦論文であったのである。廃刊号になった第六号（大正四年三月十一日）には、「読者より」として陸軍歩兵少尉某の投書を掲載した。

「私は今、初年兵掛りで毎日一生懸命にやって居ます。軍隊教育には門外漢に分らぬ或る情味があります。私は愛すべき兵の為には何物をも惜みませぬ、兵も私には無限の敬意を払って居ます。私には名誉も財産も何もありませぬ、只だ昼夜私の傍に居る七十の兵あるのみです。然しこの可愛い兵を、父も母も又妻も子もある兵を戦場に連れて行って殺すのかと思ふと、私は泣きたくなる程悲しいのです。理窟は知りませぬ。けれ共人を殺すのが自然でせうか、戦争は人間のする事でせうか。私は之を考へると、訳も無く只だ涙ぐまるのです。」

軍人のなかにも『平民新聞』を読む人がおり、そしてこのような素朴な非戦論を寄せたのである。

『平民新聞』は六号のみという半年の短い期間であったが、全号を通じ非戦論がみなぎり、「冬の時代」で沈滞していた社会主義者に活を入れるという役割を果たした。官憲の弾圧により相つぐ発禁をくらい、多数の労働者に浸透しなかったとはいえ、当時の社会主義者の非戦論としてきわめて高く評価せざるをえない。

「冬の時代」の社会主義者の統帥堺利彦は、時機をまつと行って売文社にとじこもっていたが、一九一五年（大正四年）九月『へちまの花』を『新社会』と改題し、主として社会主義的な論文・翻譯・記事のせるようになった。マルクス派社会主義者は、ようやく冬の時代最初の宣伝機関誌をもつにいたったのである。山川均は当初居住していた鹿児島からこの雑誌



に協力し寄稿した。

堺が非戦論をのべたのは、第一次世界大戦開始後すでに一年を経た一九一五年（大正四年）九月の『新社会』（第二巻第一号）に「欧州大戦終結後の問題」と題してつぎのようにのべる。

「各国とも、戦争勃発と同時に、ほど挙国一致の外観を呈して居るには相違ない。然し独逸社会党中にも開戦反対論者はある。英国社会党中にも非戦主義を宣言した一派がある。仏白社会党、シンヂカリスト、及び無政府主義者と雖も全然無条件を以て政府に賛成して居る訳ではない。」

そして各国社会党のなかの非戦論者の活躍に期待をかけ、もし戦争中に有効な非戦運動の展開が可能であれば各国社会党は戦争の終結を早め、それによって戦後社会における指導権をにぎるだろうと論じた。また『新社会』（第二巻第四号 大正四年十二月）の「時評」欄においても「非戦運動の発展」として、同じようなことを論じている。山川均も『新社会』（第二巻第二号 大正四年十月）に「大戦の後」と題して「万国社会主義運動の精神は、戦争熱、愛国熱の裡からも既に光輝を放っている」とのべるのである。

このような論議のすすめ方は、すでにのべた安部と全く同じもので、わが国の現状を論じて非戦論を説くのではなく、「戦争は既に大問題ではない。早晚片づくに極まっている。真の大問題は戦後に在る」という視点に立って、ヨーロッパの、しかも戦後の問題を論じて自己の意見を主張している。

ところで、マルクス派社会主義者の非戦論として、特徴的なものは、当然のことであるが、人道主義にもとづく非戦論を批判することである。山川は『新社会』（第三巻第四号 大正五年十二月）に「斗争と人道——トルストイの非戦論を評す——」として、トルストイの非戦論の欠点は、たんに個人的要素のみを認めて、全く社会的な要素をみていないところにあるとのべ、「トルストイは社会生活の外形を変へやうとする一切の企図を無益なものとして、只管に人道博愛の精神に訴へやうとす

る。けれども共同の生活がなく共通の利害のない人間と人間との間に、果して人道博愛の精神が起されるか。」と批判している。

ともかく、一九一五年・一六年という第一次世界大戦の最中で戦争が苛酷になっているとき、わが国の社会主義者の非戦論が、なぜわが国のことを論ぜず、戦後のしかもヨーロッパのことを論じたのであろうか。かつて日露戦争時代、平民社グループで論評した当時の姿勢はみられないのである。堺や山川が、第一次世界大戦に参加したわが国の侵略的性格、わが国の帝国主義について、また非戦運動のもつ意義について知らないはずはないのである。やはり、日露戦争がわが国の命運をとした戦争であり、第一次世界大戦が便乗的性格をもった参戦というわが国の戦争にたいするかかわり方以外にもう一つの原因がそこには存在する。それは、大逆事件の悪夢で、冬の時代は依然としてまだ終ってはいなかったのである。社会主義者が戦争の本質を知り、非戦運動の必要性を認識していながらも、わが国の現状では組織もなく、その具体化が困難であり、不可能と判断して、このような論評活動にのみ終らざるをえなかったといわざるをえない。当時の社会主義者が、第一次世界大戦を主体的にうけとめて、積極的に反対し、運動するというには、余りにも大逆事件の悪夢が大きな障害として残っていたのである。

しかし、第一次世界大戦も終末に近づき、国外では、ロシア革命の成功、国内ではデモクラシー運動の昂揚、米騒動などにより、一九一八年（大正七年）頃には、長かった「冬の時代」も終りをづけ、デモクラット、社会主義者ともに公然と政治・社会運動へと乗り出すこととなった。<sup>(1)</sup>したがって一九一八年八月のシベリア出兵にさいしては、社会主義者は、革命の祖国ロシアにたいする干渉戦争反対の立場からシベリア出兵反対論を唱え、しだいに反対運動を展開することとなる。

(1) 石川旭山編・幸徳秋水補「日本社会主義史」、『明治社会主義史論』所収）八三ページ。

(2) 大逆事件をひきおこしたきつかけは、明治四十一年六月二十二日の赤旗事件である。赤旗事件にたいする桂内閣の弾圧は予想外にきび

しく、大杉栄・荒畑寒村・山川均・堺利彦・菅野須賀子・大須賀里子らを重禁錮一年以上二年六月におよぶ重刑に処した。また八月に於て、明治三十九年の電車賃値上げ反対運動の兇徒聚集事件の刑が確定し、西川光二郎が重禁錮、岡千代彦・山口義三・吉川守圃・樋口伝らがいずれも重禁錮一年六月に処せられた。このように予想外にきびしかった判決は、直接行動派の社会主義者の態度をいぢるしく硬化させ、彼らをして、実力で権力と対抗しようとする直接行動へかりたてる直接の原因となつたのである。

(3) 早稲田大学編『安部磯雄―その著作と生涯―』四一―四二ページ。

(4) 松下芳男『明治大正反戦運動史』四〇―四一ページ。

(5) 『六合雜誌』(明治三十七年二月号)。社論として「基督教と非戦論の題のもとに書かれている。当時の『六合雜誌』は黒岩周六、海老名弾正などの主戦論者の察稿もあるが、全体的にみれば、非戦論者の説が有力であり、非戦論の一つの拠点でもあつた。

(6) ノルマン・エンゼル著・安部磯雄訳『現代戦争論―兵力と国利の關係―』参照。松下泰雄「ノーマン・エンゼルの平和論」(『平和思想史』所収)参照。

(7) 早稲田大学編『前掲書』四四―四五ページ。

(8) 売文社は、四谷区南寺町にある堺の自宅が事務所となり、番頭格に岡野辰之助があたり、大杉・荒畑・高島の社員のほか、白柳秀湖・山口孤剣・田川大吉郎らが協力した。営業種目はつぎのようになっている。

「作文反訳一切の業務を取り扱ふほか凶案意匠部・写字部・速記部等あり、業務親切丁寧迅速、近地はお申し越し次第社員参上、御用命を伺ふ」

(9) 『近代思想』を發刊したとき、大杉は二十七才、荒畑は二十五才であつた。雑誌は三二ページの薄っぺらいもので、大杉はおもに評論や詩を書き、荒畑は小説を發表し、堺も毎号短文を寄稿した。この雑誌を發行することによつて全国に散在している同志たちと連絡をとれるようになったことがなよりの収穫であつた。發行所は大久保百人町の大杉の自宅であつた。

(10) 『近代思想』(大正二年八月号・大正三年一月号)参照。

(11) 大杉栄『自叙伝』二九六―二九七ページ。

(12) 『へちまの花』第一三号(大正四年二月)。なお『へちまの花』を改題した『新社会』第二卷第一号(大正四年九月)に、「非戦主義者」としてこの三人を写真入で紹介している。

(13) 「日和見主義と第二インタンショナルの崩壊」『レーニン全集』第二卷四五六―四六六ページ。

(14) 『新社会』第二卷第五号(大正五年一月)。

(15)

この時期の非戦論として特筆しなければならないのは、佐野袈裟美「永久的平和の方へ」(『六合雜誌』大正七年七月号)である。この論文によって『六合雜誌』は発禁をうけたが、このなかで佐野はつぎのようにのべている。

「独逸の暴挙ばかりを攻めて、聯合國は自分の責任を他にのりつけるやうな狡猾なことをしてはならない。真に正義を感じ平和を欲するならば、自ら進んで直ちに武器を焼き棄て、戦争を止むべきである。日本の出兵は欧州にしても、シベリアにしても、全くいはれがない。……本当に世界の平和を望むのであるならば、よろしくレーニンのとつた態度に出でなくてはならない。……露西亜は世界的平和の理想を実現する為めに率先して大なる犠牲を払はなければならなかつたのであらう。レーニンは平和の理想の為に國家としての利害を度外に置いたのに違ひない。……レーニンはウイルソンやロイド・ジョージに較ぶれば、遙かに真実であるやうに思はれる。彼には何等の掛け引きもない。生一本である。卒直である。……吾々は思ふ。永久的平和が持ち来たとすれば、それは英吉利や亞米利加からでなく、露西亜からであると強制的に平和を持ち来たさうとしても、決して眞の平和が持ち来たされるものではない。永久の平和を望むならば自ら進んで武装を解除するがよい。」

佐野の思想のなかには、明らかに、ロシア革命後の社会主義思想が入りこんでおり、マルクス主義に立つ平和論を主張している。『冬の時代』に終りを告げる論文であるといつても過言ではあるまい。